

## 専門演習におけるフィールド体験活動

—地域の聴覚的価値の発見—

The Field Activities as part of Special Seminal: Discovering the Local Acoustic Resources

田中卓也（静岡産業大学・共栄大学非常勤講師）・兼古勝史（共栄大学非常勤講師）・小林田鶴子（神戸女子大学）

Takuya TANAKA・katsushi KANEKO・Tazuko KOBAYASHI

### 概要

本稿は、共栄大学教育学部の2つのゼミが共同で実施してきたフィールド体験活動の中からサウンドエデュケーションの事例について振り返り、主として2017年秋に実施した「山崎山まつり」での「音の絵はがき」づくりワークショップを中心にその概要を報告するとともに、その意義や学びの可能性について、活動の記録、成果物、スタッフとして参加した学生からの感想文をもとに分析・考察を試みたものである。これらの作業の結果、専門演習での聴覚的なフィールド体験活動が、子どもたちや学生にとって地域や環境との新たな関係性を拓く契機となり、地域の聴覚的価値を発見する方法のひとつとして大きな可能性を持つことが示された。

キーワード：専門演習，フィールド体験，サウンドエデュケーション，聴覚的価値，メディア

### Abstract

In this paper, we look back on the case of sound education from the field experience activities jointly carried out by Tanaka, Kobayashi and Kaneko seminars of Kyohei university Faculty of Education. And we mainly report on the outline mainly about “sound postcard creation workshop” at “Yamazaki Yama Festival” held in the autumn of 2017 and as a record of activities, deliverables, staff about the significance and the possibility of learning We will try analysis and discussion based on impressions from students who participated. Through these tasks, these auditory field experience activities in Special Seminal are one of the ways for children and students to discover the local acoustic resources as a trigger for new relationships with the community and the environment It clearly showed that it is effective.

**Keywords:** special seminal, field activities, sound education, acoustic resources, media

### はじめに—本研究の位置づけと目的—（田中・兼古・小林）

共栄大学教育学部では、大学3年生から専門演習の授業が始まる。教育学部田中卓也ゼミ、小林田鶴子ゼミ（兼古勝史ゼミ）では、その専門演習での活動の一環として、近隣自治体と連携した、フィールド体験活動を行ってきた。これらゼミ活動でのフィールド体験活動では、自然体験、地域探求などをテーマとして、地元の小学生など子どもたちを対象に「冒険遊び」や「オリエンテーリング」「アウトドアクッキング」などを実施してきたが、その中で継続して取り組まれてきた活動の一つとして「手作り楽器づくり」や「音探し」「音地図づくり」などの「音」をテーマとした教育活動、即ちサウンドエデュケーションがある。本稿は、これまで年度ごとに順を追って個別に報告・検討されてきたフィールド体験活動の中から、サウンドエデュ

ケーションの事例について注目し、その軌跡を振りつつ、筆者ら（田中、兼古、小林）3人が共同で実施した直近の取り組みである2017年秋の宮代町山崎山での「音の絵はがきづくり」ワークショップの事例報告を中心に「音を通したフィールド体験学習」について、その意義と学びとを考察するものである。その意味で、本稿はこれまでに筆者らが執筆した「専門演習における地域と連携した取り組み」（小林、田中、2016）、「専門演習における地域と連携した取り組み（2）一宮代町里山自然体験活動を中心に」（田中、兼古、小林、2017）及び「専門演習における地域と連携した取り組み（3）」（田中、2018）の補論編ともいえるべきものである。

本稿の目的は、教育学部での専門演習の一環としての「フィールド体験活動」におけるサウンドエデュケーションの意義と可能性を明らかにすることである。研究対象は授業の一貫として行ったフィールド体験活動事例およびこれにスタッフとして参加したゼミ学生・有志ボランティア学生であり、研究方法としては、ゼミ学生および有志ボランティア学生の感想文の考察、活動当日に実施した参加児童・幼児の反応や制作した成果物の比較検討の手法を用いた。

## 1. 専門演習・フィールド体験活動におけるサウンドエデュケーションの試み（田中・兼古・小林）

共栄大学教育学部専門課程「専門演習」のゼミ活動の一環として、田中ゼミ、小林ゼミでは2014年夏以来埼玉県宮代町の里山をフィールドとした「里山自然体験活動」に取り組んできた。これは、地元宮代町と連携して、地域の小学生を対象に、子どもたちが地域の自然を体験することができるよう、ゼミの学生たちが自ら企画・実施の主体となり、地元の自治体職員や自然保護団体、ゼミ教員らの指導の下に様々な自然体験学習のメニューを提案し実施して来たものである。小林が音楽担当の教員であったことから、当初より活動内容のひとつとして「手作り楽器」の作成など、音をテーマとしたワークショップが含まれていた。この活動は2016年度、小林ゼミを引き継ぐこととなった音楽担当教員の兼古ゼミに受け継がれた。

こうして音を切り口としたフィールド体験活動は、宮代町の里山自然体験活動「あそべんちゃーわーど」の中の柱の一つとして、子どもたちの人気を得、定着しつつあったが、小林ゼミの4年次学生を引き継いだ兼古ゼミは、臨時の1年間限りのものであったため、翌2017年夏の活動は、田中ゼミ単独で実施する形となり、音に関する活動は行われなかった。こうしたことから、同地域でのもう一つの里山自然体験活動である秋の「山崎山まつり」において、田中ゼミの活動に、兼古・小林両名が企画・実施スタッフとして加わる形で、音のワークショップの活動を再開させたのが、本稿で主として報告・検討する事例である。夏から秋へと実施の時期は移ったものの、この活動は宮代町と共栄大学ゼミが行ってきたフィールド体験活動におけるサウンドエデュケーションの流れをくむものである。その意義を理解するためには、これまでのフィールド体験活動におけるサウンドエデュケーションの取り組みについて振り返る必要がある。

### 1.1 宮代町「あそべんちゃーわーど」におけるサウンドエデュケーション（小林・田中・兼古）

2014年の「あそべんちゃーわーど」での「音」を切り口にした活動は、山崎山の「音さがし」と「手作り楽器」づくりを行った。音さがしは、カラスや虫など、山崎山の生き物の鳴き声に耳を澄まし、手作り楽器では、山崎山に生育する竹を用いた。参加した子どもたちは、用意された竹を叩き、幹や枝など部位による音色の違いを探求しながら、バチも胴体もすべて竹からなる「竹太鼓」を制作した。最後に、既成の曲にあわせて竹太鼓でリズムを取ったりした。

2015年も基本的に前年の活動を継承したものであったが、手作り楽器は山崎山の自然の材料と身の周りにあるものを組み合わせて5種類制作した。演奏時は山崎山の池の周りに楽器ごとにパートに分かれて集まり、ゼミ生の演奏するジャンベ（アフリカの太鼓）に合わせてリズム演奏を行い、自然環境の中で演奏する楽しさを体験した。

続く2016年も同様の活動が行われた。この時には、楽器の素材となる材料をあらかじめ山崎山の各所に

隠し、子どもたち自身が探して見つける、という趣向を導入したが、これは、地域の環境の中に潜む音の可能性を自分たちで見つけ出すという行為を疑似的に体験することでもあった。また手作り楽器による即興演奏では、次第に音量を落としていくことで、音楽と環境音の図と地が逆転し、里山の静けさに耳を澄ます体験も行った。

### 1.2 「子ども大学かすかべ」におけるサウンドエデュケーション（小林）

ゼミが関わるフィールド活動は、宮代町の里山活動ばかりではない。共栄大学の学生はほかにも、「子ども大学かすかべ」にも参加してフィールド活動を行っている。

「子ども大学」は埼玉県教育委員会が2002年から推進している事業で、県内の各市町にある大学が核となり、地域の企業、NPO、市町の教育委員会が連携して、子どもの知的好奇心を刺激する学びの場を提供する目的で行われているものである。講義内容は「はてな学」（ものごとの原理やしくみを追求）、「ふるさと学」（地域を知り郷土を愛する心を育てる）、「生き方学」（自分を見つめ、人生や将来について考える）の3つと「その他」（各大学が自由に設定できるもの）が大きなテーマとなり、その具体的な中身は、毎年各市町の教育委員会と開催大学が検討して決める。

こうした枠組みの下、「子ども大学かすかべ」は春日部市と春日部市青年会議所との連携事業として、共栄大学を会場に、2012年度から実施されている。参加対象者は春日部市内の小学校に通う4年生～6年生50人程度であり。実施時間は10時30分から12時15分である。毎年9月から12月の土曜日を中心に4回の日程が生まれ、4回受講すると前述の「はてな学」「ふるさと学」「生き方学」の全てが学べるカリキュラム設定となっているが、この中の「はてな学」において、以下のような「音」に関する内容を実施した。

#### (1) 「音マップ」づくり：テーマ「音を感じる、音を楽しむ」（はてな学）

実施日程：2013年9月7日（土）

講師：小林田鶴子（小林ゼミ生および教育学部有志の学生がアシスタントとして参加）

参加児童：春日部市内の小学4～6年生 50人

実施内容：大学内を探索して「音マップ」を作成する。

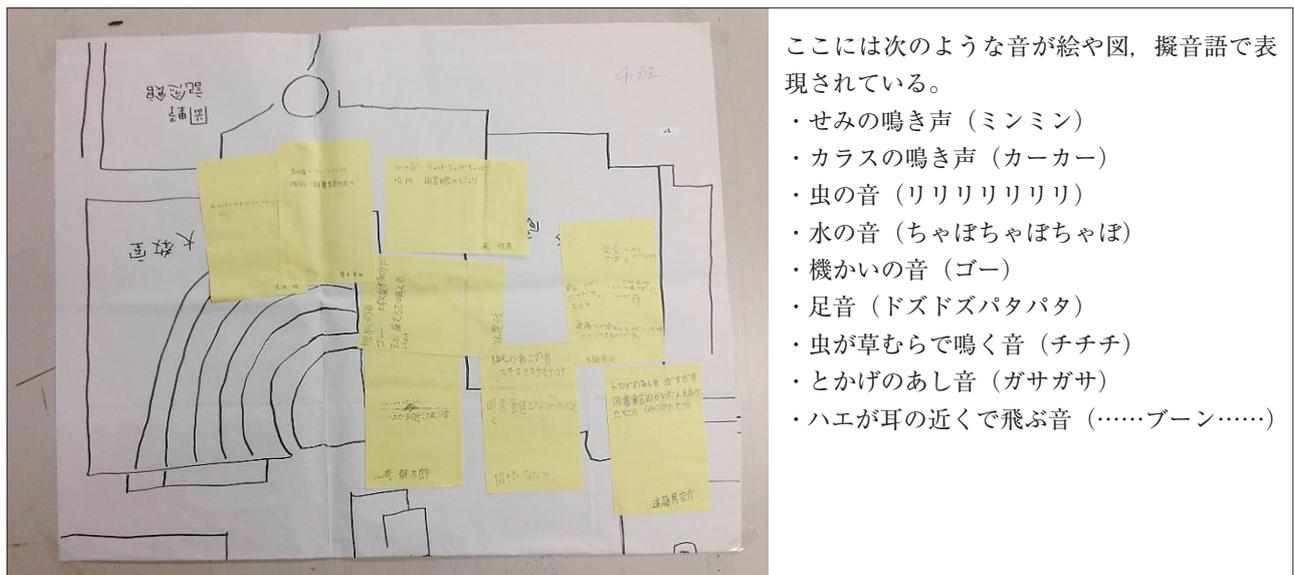


図1 参加者が作成した、共栄大学大教室近くの中庭の音マップ（2013）

- 具体的には以下のような順序でサウンドエデュケーションの手法を取り入れたワークショップを行った。
- ①音当てクイズ (耳のウォーミングアップ) …ガーゼのハンカチにくるんだペットボトルの蓋や卵の殻、クリップ、短い鉛筆など身の周りのものの音を鳴らし、何が入っているかを当てる
  - ②音のイメージ図 (音の視覚化) …大太鼓やフレクサトーンを聴いて音のイメージを図で表す
  - ③音探検とマップ作り (音によるフィールド体験) …グループごとに大学内を探検して発見した音を、文字やイメージ図で付箋に書き、それを模造紙に書かれた地図上の音の鳴っていた場所に張り付けて「音マップ」を作成。(図1, 2)

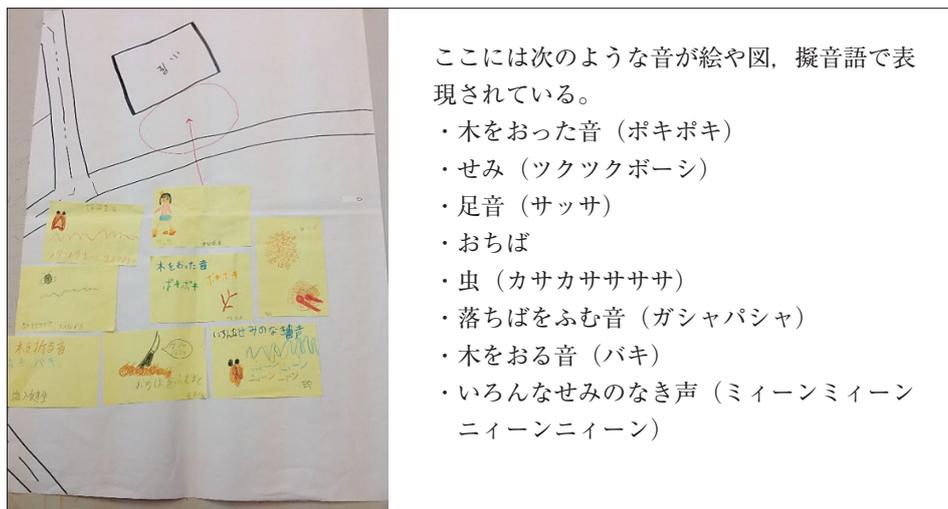


図2 植物小屋付近の音マップ (2015)

ここで「音マップ」について簡単に説明すると、「音マップ」とは「音地図」ともいわれ、地図上に音の鳴っている (聞こえる) 地点を示し、音の様子を文字や絵、記号で記入するものである。これをパソコンなどのメディアを使って、録音した音をパソコン画面上の地図に貼り付けて、写真や絵、記号 (アイコン) などをクリックすると、その音が聞けるようにしたものを「音の出る地図」という。

(2) 手づくり楽器づくり：テーマ「音の不思議を知って身のまわりの音を楽しもう」(はてな学)

実施日程：2015年10月12日 (土)

講師：小林田鶴子 (小林ゼミ生がアシスタントとして参加)

参加児童：春日部市内の小学4～6年生 50人

実施内容：楽器の音の出る仕組みを知り、身のまわりのもので手作り楽器を作成し、アンサンブルをする

ワークショップの流れは以下のようなものである。

- ①楽器の音の出る仕組みについての学習…グランドピアノの音の出る仕組みを知ったり、チューバの倍音を聴いたりする
- ②身の周りのもので手作り楽器の作成…牛乳パックを丸めて吹き口にストローを使用した笛、プラスチックカップの底に竹ひごを通して (固定して) 擦るクィーカー、プラスチック容器の中に大学の中庭で拾ってきた木の実を入れたマラカスを作成する
- ③手作り楽器を使った演奏…ゼミ生が演奏するジャンベのリズムに合わせて、楽器ごとに決められた簡単なオスティナート (短いリズムやメロディを繰り返す) の演奏を行う。

以上が「子ども大学かすかべ」で実施したサウンドエデュケーション活動である。

### 1.3 2016年度までのフィールド体験活動におけるサウンドエデュケーション

フィールド体験活動における、サウンドエデュケーションを実施時期別にまとめると「表1」のようになる。

表1 近隣地域との連携によるフィールド体験活動におけるサウンドエデュケーション

実施年月	2013年9月	2014年8月	2015年7月	2015年10月	2016年7月
催事	第2回 子ども大学 かすかべ	第1回 あそべんちゃーわー るど	第2回 あそべんちゃーわー るど	第4回 子ども大学 かすかべ	第3回 あそべんちゃーわー るど
実施場所	共栄大学（春日部市）	山崎山（宮代町）	山崎山（宮代町）	共栄大学（春日部市）	山崎山（宮代町）
活動	身の周りの音に耳を澄まして「音さがし」をし、「音マップ」を作成	「音さがし」と竹（山崎山の素材の）「手作り楽器」作成、既成の曲に合わせたリズム演奏	「音さがし」と「手作り楽器」の作成（身の周りの物）とpk打楽器アンサンブル演奏	音に耳を澄まし、音の出る仕組みを知り、身の周りの物での楽器作りと演奏	「音の素材さがし」と楽器作り（山崎山の素材と身の周りの物）と打楽器アンサンブル、即興演奏、自然の音に耳を澄ます

上記に示されているように、春日部市や宮代町などの近隣地域と連携した共栄大学教育学部専門演習の教育活動においては、地域の子どもたちの「音」の感性をはぐくみ、音から大学や地域といったフィールドを探索探検活動が盛り込まれていることが特色の一つとなっていることがわかる。楽器作りでは年度を経るごとに、地域で得られる素材と身の周りの物の両方を利用するようになり、それを使った演奏も既成の曲から参加者の即興演奏やアンサンブルへと発展している。こうしたことから、春日部市「こども大学かすかべ」での「音さがし」や「身の周りの物での楽器づくりと演奏」も宮代町「あそべんちゃーわーるど」における「里山での楽器づくり体験」も、ともに日常や地域の中にある身近な素材から音を見つける活動であり、これらは「音マップ」づくりと同様に広い意味で「地域の聴覚的価値の発見」につながるものであったと言える。

## 2. 「山崎山まつり」フィールド体験活動でのサウンドエデュケーション

### 2.1 山崎山まつりにおけるフィールド体験学習の概要（田中・兼古）

共栄大学教育学部ゼミ生が関わる宮代町でのフィールド体験活動は、夏の「あそべんちゃーわーるど」の他に秋の「山崎山まつり」がある。2015年の秋、地元山崎山の環境保全に取り組む「みどりのトラスト協会」主催者のひとりでもあった八木橋氏より相談され依頼を受けたことが契機となり、田中ゼミ生（小林ゼミ生も翌2016年に手伝いとして参加している）が中心となって行ってきた。夏期の「あそべんちゃーわーるど」が、ゼミ生が内容を企画し、宮代町教育委員会生涯学習担当職員や八木橋氏に相談しながら進めていく形であったのに対し、秋の「山崎山まつり」は、八木橋氏から依頼された内容を学生がアレンジして行うというスタイルであった。しかしながら秋の里山活動についても回を重ねるにつれて参加学生から内容についての希望や意見が出るようになり、2018年10月には、秋期の企画として、ゼミ側が内容を提案し実施する最初の試みとなった。

### 2.2 フィールド体験活動の一環としてのサウンドエデュケーション（田中・兼古）

2016年度までの「山崎山まつり」では、山崎山の集会所周辺を中心に木工の装飾品販売、ツリークライミング体験、伐採体験、ドラム缶ピザづくりなどが主に実施され、延べ100名程度の町民が参加し、秋のひと時を過ごした。2017年秋の活動においては、これらの企画に加えて、ゼミ側からの提案として「音を切り口としたフィールド体験学習」、すなわちサウンドエデュケーションの活動を新たに加えることとし、成果物として山崎山の「音マップ」を作るという方向で検討することになった。そこで、子どもたちが楽しみ

ながら取り組み、個人個人の多様な音の感性を反映し、かつその成果物を参加者一人一人が持ち帰ることができ、さらにその集積から最終成果物として「音の地図」(Sound Map) を作ることでできる手法、として「音の絵はがき」(Sound-Picture Postcard) づくりのワークショップを行うことにした。その目的は、これまでの小林ゼミ・兼古ゼミのフィールド体験活動でのサウンドエデュケーションの経験を活かしつつ、参加した子どもたちが、里山の様々な音への気付きの体験を通して、視覚だけでは捉えきれない自然環境の多相的な姿を感じ取るとともに、子どもたちなりの目線ととらえた里山の“聴覚的な価値”を発見し、明らかにすることにあった。ここでいう“聴覚的な価値”とは、地域の環境や風景、日常の中にある「音」(静けさを含む)や、その集合体としての「音の風景」、すなわち「聴覚的な景観」に耳を澄ますことで浮かび上がってくる地域の「個性」や「魅力」のことであり、「聴覚的な価値」の発見とは、地域の中で、自分なりの「音の名所」を探すこと、子どもたちにわかりやすい言葉で置き換えれば、地域の中の「ステキな音」を見つけることに等しい、そのため、自然体験学習の名称を「山崎山いい音(ね)！音の絵ハガキづくり」ワークショップと名付けた。

### 2.3 「音の絵はがき」づくりについて (兼古・小林)

ここで「音の絵はがき」づくりについて、説明したい。「音の絵はがき」づくりは、2015年以降、兼古・小林らも参加している日本サウンドスケープ協会ワーキンググループ「まち・音・ひと・ねっと」(代表・小菅ゆかり)の取り組みの中で実施し開発してきたサウンドエデュケーション及び地域の聴覚的価値を発掘する手法である(小菅・兼古, 2016, 小林・兼古, 2018)。内容は、参加者が「音」をテーマに地域を移動しつつ自ら写真を撮影し、自分なりのオリジナルの絵はがきを作成するというもので、参加者にとっては地域の新たな魅力への気づきと環境に対する音の感性を開く契機となり、地域にとっては参加者の作成する「絵はがき」の集合知として地域の聴覚的価値が浮かび上がってくることを目論んだものである。(図3)



図3 「音の絵はがき」の例 (2015)

### 2.4 山崎山での「音の絵ハガキ」(兼古)

2017年秋・山崎山のサウンドエデュケーションでは、この「音の絵はがき」づくりの活動をベースにしつつ、さらに表現領域の幅を広げ、より地域の音を身近に感じてもらうために、共栄大学内ベンチャー・産学連携組織「有限会社かいしゃごっこ」(以下「かいしゃごっこ」と略)(代表：海老原武 共栄大学教授)の助言と協力を得て、技術的な工夫を加えることとした。これまでの「音の絵はがき」(Sound-Picture Postcard)づくりは、写真とタイトル等の文字情報のみで構成された、いわば「音をテーマに撮影された写真」による絵はがきであったのだが、今回は、実際に録音した現場音を絵はがきの中に入れ込む「音の出る絵はがき」(Audible-Picture Postcard)づくりを試みることにした。具体的方法としては、現場で録音されたMP3音源をインターネットでアクセス可能なサーバー上に保存公開し、そのアドレスを二次元バーコード(以下「QRコード」と略)に変換、これを絵はがきの中に埋め込み、手持ちのスマートフォン(以下「スマホ」)で読み取ることで、絵はがきを見ながら同時に現場の音風景を再生してることが出来るというものである。この方法により、参加者自身が写真撮影時に合わせて録音した現場音(=地域の音風景)等を聴くことのできる「音の出る絵はがき」が



図4 山崎山で製作した「音の出る絵はがき」の例

完成する（図4）。

## 2.5 「音の出る絵はがき」の仕組み（兼古）

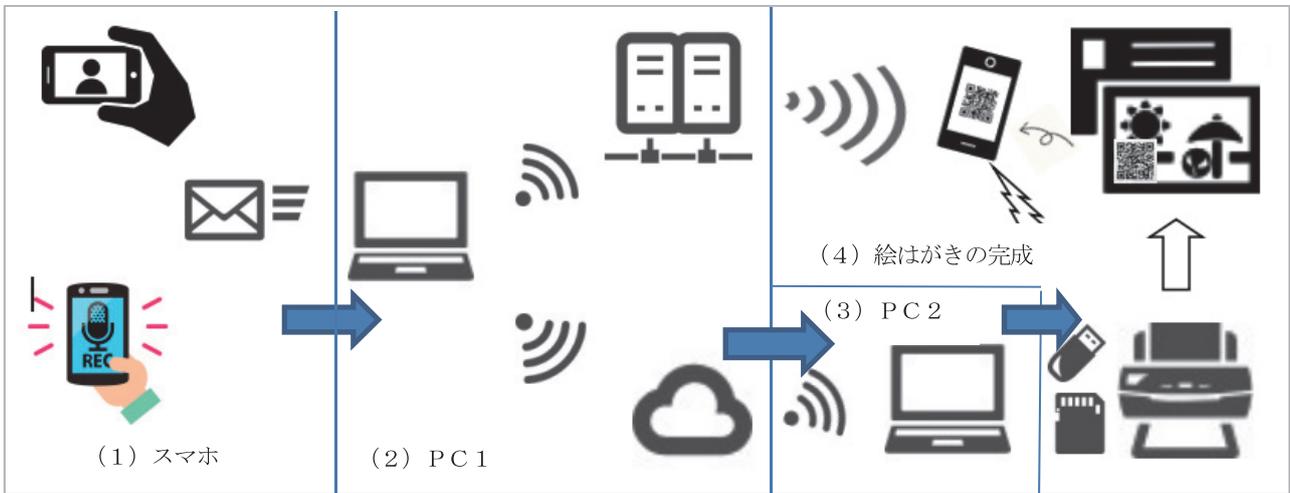


図5 「音の出る絵はがき」制作のためのシステムイメージ図

「音の出る絵はがき」の仕組みは、大まかに言って(1)記録・集約段階(=スマホ操作)：現場で記録された写真の画像と録音の音声データの集約用PC(PC1)へのメール送信・集約(今回は子どもたちが主対象のためスタッフが代行)、(2)FFFTPアップ・QRコード生成段階(=PC1作業)：受信・集約した各「画像+音声データ」セットの公開用サーバー(「(かいしゃごっこ)」のサーバーを利用)へのアップ(FFFTP)、とアップ先公開用アドレスのQRコードへの変換・生成及び、当該画像とQRコードの絵はがき版下作成用のPC(PC2)への送信、(3)版下作成段階(=PC2作業)：(PC1から受信した)画像とQRコードによる絵はがきの版下データ(タイトル等+写真+QRコード)の作成とその版下データのリムーバブルディスク(SDカードまたはUSBフラッシュメモリ)への保存、(4)はがき印刷・音声再生段階(=絵はがきの完成)リムーバブルディスク経由ハガキプリンターでの絵ハガキ印刷と、完成した絵ハガキ内のQRコードのスマホでの読み取りと録音の再生、の4段階からなる(図5)。



図6 参加者に配布したQRコード入りの缶バッジ

なお、(1)のスマホによる撮影・録音・送信作業、および(4)の完成した絵はがきのQRコードのスマホによる読み込みは、本来は参加者自身がおこなうものであるが、今回はワークショップの参加者に低学年児童や未就学幼児(親子連れを含む)が多かったため、スタッフの学生が子どもたちとコミュニケーションをとりつつ代行した。また、(2)から(4)のPC1~2及びプリンターでの作業は学生スタッフと教員が担い、(2)のPC1の作業は作業効率を高めるため2台のPCで同時並行的に処理した。また、(1)から(2)へのメール送信はスマホのメール送信機能で行い、(2)のFFFTP作業とQRコード生成及び(2)から(3)へのデータ送信は用意したWiFi機器によるインターネット通信経由で、(特に(2)のPC1から(3)のPC2への移行はインターネットクラウドサービスのDropboxを使用)、(3)から(4)のプリンターへのデータ移行は用意したリムーバブルディスク(SDカードまたはUSBフラッシュメモリ)を用いた。

また、今回はワークショップの参加者全員に、「かいしゃごっこ」の協力により制作したQRコード入りの缶バッジ(図6)を配布した。これは、参加する子どもたちへのインセンティブとしての意味合いの他に、

作成した絵はがきが投函して手元になくなってしまった後でも、参加者が写真と録音にいつでもアクセスできるための工夫で、サーバ上のはがきの一覧メニューページにアクセスできるようになっている。

## 2.6 事前の準備 (兼古)

本ワークショップの実施に当たり、技術的な側面については、前述の「かいしゃごっこ」の全面的な協力とアドバイスを得た。同社のネットワーク・サーバーに音源と写真(完成した絵はがきの画像データ)を保存・公開すること、そのアドレスをQRコードに変換して絵はがき内に埋め込むことなどの技術的な枠組みが定まった。事前作業として音源や写真をネット上にアップロードし公開するための受け皿を同社サーバー内にあらかじめ設定するとともに、ネットワークサーバーへのアップロード作業(FFFTP)を行う技術的手順について教員と学生とで学習し共有した。また、同社海老原代表の提案により、同社サーバー上の絵はがきの画像と音声データにアクセスするためのQRコード入り缶バッジ約20個を製作、参加者に配布することとした。

また、日本サウンドスケープ協会のワーキンググループ「まち・音・ひと・ねっと」と「自然のひびきを聴く会」(共同代表:大庭照代, 兼古勝史)の2つのグループからは、それぞれ企画への助言とワークショップ当日に引率や解説を担当する講師の派遣・参加などの協力を得た。特に「音の絵はがき」づくりは兼古・小林が、ここ数年「まち・音・ひと・ねっと」ワーキンググループの活動の中で他のグループメンバーとともに実践してきたものであり、その経験が、絵はがきの形式、機材の選定、作業手順、人員の配置などに生かされた。絵はがきの中に「写真」だけでなく「文字情報」によるタイトル等も含めた方が一人ひとりの音の捉え方の個性が浮かび上がること、スマホとメール送信の利用、はがき専用プリンターの使用、PC操作段階の機材と人員を厚くしたことなどがこれにあたる。

実施の主体となる学生スタッフについては、田中ゼミがこれを担当した。同ゼミの学生スタッフとともに事前の2回の説明・打ち合わせ会議と2回の下見を行った(2018年10月)。当日の作業手順や時間配分について検討するとともに、子どもたちにわかりやすく楽しんでもらうための指示プレートや演出等についてのアイデア出しを行った。

## 2.7 当日の実施状況 (兼古)

これまで述べた準備を経て、2017年「第3回山崎山トラスト祭り」～「山崎山いい音(ね)!音の絵はがきづくり」ワークショップは以下のような学生スタッフと教員・講師の体制で実施した。

学生スタッフ:共栄大学教育学部(田中ゼミ3年生1名, 卒業生1名, 共栄大学教育学部有志1年生4名,  
計:6名)

統括責任者:田中卓也(共栄大学)

実施責任者・ワークショップ講師:兼古勝史(共栄大学)

ワークショップゲスト講師:大谷英児(森林研究・「鳴く虫」の研究=森林総合研究所多摩森林科学園/  
日本サウンドスケープ協会ワーキンググループ「自然のひびきを聴く会」メンバー)。小林田鶴子(「音  
の出る地図」[音楽教育]研究=神戸女子大学/元共栄大学・日本サウンドスケープ協会ワーキンググルー  
プ「まち・音・ひと・ねっと」メンバー)

技術指導・助言・機材提供・企画協力:有限会社かいしゃごっこ

企画協力・ワークショップゲスト講師派遣:日本サウンドスケープ協会ワーキンググループ「まち・音・  
ひと・ねっと」「自然のひびきを聴く会」

また参加者（子ども）は、当日「第3回山崎山トラスト祭り」会場に来ていた子どもたちに学生スタッフがチラシ等を配布して呼びかけた結果、未就学幼児4名、小学生児童5名（小1・3名、小2・1名、小3・1名、小6・1名すべて保護者同伴で参加）計9名の参加者を得た。天候が曇りから雨に変わりつつある中での実施となり、参加人数は少なかったが、最初の“試み”としては程よい人数であった。当日のタイムスケジュールは、表2の通りである。天候の影響などから、ワークショップの進捗に時間がかかったこともあり、進行がやや遅れ気味となった。

表2 当日のタイムスケジュール

8:30	学生スタッフ、引率講師会場集合、事前打ち合わせと機材セッティング、技術確認等
10:00	会場内へのチラシ配布と宣伝、ワークショップ専門講師の到着・会場下見
12:15	第1回ワークショップ（～13:15）
13:15	休憩・昼食
14:00	第2回ワークショップ（～15:00）
15:00	～撤収

ワークショップは以下の手順で実施した。

- (1) 挨拶、概要説明（森の集会所／5分）
- (2) 専門講師＝「鳴く虫博士」（大谷英児氏）による、「鳴く虫」についての解説（森の集会所／5分）
  - ・スライドとCD音源による、この時期の山崎山及びその周辺の鳴く虫の解説と鳴き声紹介（図7）
- (3) 企画・講師（兼古）による、「音の絵はがき」づくりの手順と諸注意、ウォーミングアップ（イヤークリーニング）（森の集会所前の庭、神社境内／5分）
  - ・イヤークリーニングとして1分間周囲の音に耳を澄まし、「一番遠くからの音」「一番小さい音」などを探った。
- (4) 専門講師（音の出る地図づくり）（小林）の引率のもと、子どもたちによる「山崎山いい音（ね）！ポイント探し」のフィールドワーク（「山崎山」及びその周辺エリア／25分）
  - ・耳を澄まして会場内を歩き、気にいった音の聞こえる「いい音（ネ）！」ポイントを選ぶ。（図8）
  - ・選んだ「いい音（ネ）！」ポイントのタイトルをつけ、そのタイトルと場所、選んだ自分の名前を、配布した現地地図に記入。（学生スタッフが補助・代行）
  - ・選んだ場所の風景をスマートホンのカメラ機能で写真撮影。（学生が補助・代行）



図7 スライドで子どもたちに鳴く虫の解説をする「鳴く虫博士」の大谷英児氏（右端）



図8 山崎山で「いい音（ね）！」ポイントを探して歩く参加者の子どもたちと父兄

- ・スマホの「MP3レコーダー」アプリケーションを用いて、その場の音の風景と、参加者の子ども自身の声による紹介を録音。
  - ・撮影した写真のJpeg画像データと録音のMP3音声データをその場でe-mailにより指定のメールアドレスに送信。
- (5) 「音の出る絵はがき」作成（この作業は実際には（4）（6）の手順と並行して実施）（30分）
- (6) 各自の「いい音（ね）！」ポイントの写真による報告・紹介と、完成した「音の絵はがき」の地図への添付（「音の地図」の作成）（15分）
- (7) まとめ講評と、持ち帰り用「音の絵はがき」「缶バッジ」の配布（5分）解散。

### 3. 成果と考察（兼古・小林）

本ワークショップの成果物として、参加した子どもたちによる「音の絵はがき」と、それらを添付し集積した「山崎山いい音（ね）！音MAP」が完成した。この他、スタッフの学生からの感想が集まった。その結果を以下に示す。

#### 3.1 子どもたちが制作した「音の絵はがき」（兼古）

ワークショップの成果として完成した「音の絵はがき」は「表3」に示したとおりである。表中の再生回数とは、サーバー上に公開した当該絵はがきの録音・画像がQRコードによって再生されたアクセス数である。（※児童の保護の観点から参加した子どもの顔と名まえが明らかにならないように写真・絵はがき等に修正を施してある）。(図4, 9, 10)

子どもたちが選んだ音は、竹を打ち鳴らす音、小枝の折れる音、森のざわめき、小鳥の声、金属製のベンチをたたく音、砂利道の足音、井戸の水音など、多様であり、必ずしも「自然の音」だけではないことに留意しておきたい。そして、当該ページのカウンターの記録によれば、参加の各子どもたちの絵はがきの音の再生回数は、軒並み1000回を超え、缶バッジのQRコードからアクセスすると開く「メニューページ」の再生数は2017年10月28日の公開日から約5か月で1415ビューに達している。

またこれらの「音の絵はがき」の集積として、以下（図11）のような「山崎山 いい音（ね）！音MAP」が完成した。

表3 完成した「音の絵はがき」

番号	タイトル	制作者の属性	選定理由	再生回数
	(選定した音・場所の概要)			
1	「たけのおんがく」 山崎山の車道からほど近い小径の入り口付近に立つ竹製のオブジェ	幼・男子	おもしろかったから	1279
2	「かぐやの森」 山崎山の森と農耕地の境目付近	小2・女子	鳥さんが歌っているみたいできれいだったから	1272
3	「ポキ！」 山崎山の森の中の木の根付近に落ちていた小枝を踏む音	幼・女子	面白い音がしたから	1255
4	「トントン」 魔女のハーブ園近くのベンチ	小1・女子2名	選定理由不詳(白いベンチをたたくとトントン音がする)	1260
5	「ざわざわの森」 山崎山の森の中	小6・男子	森がざわざわしていて落ち着ける	1254
6	「じゃりじゃり」 選定した(撮影・録音の)場所	小1・男子	じゃりじゃり…	1254
7	「森にひびくジェットコースター」 山崎山の東武動物公園寄りの外縁部	幼・男子	選定理由不詳(隣接するテーマパークのジェットコースターの音が森の中に聞こえてくる)	1261

番号	タイトル	制作者の属性	選定理由	再生回数
	(選定した音・場所の概要)			
8	「いどのみず」 魔法のハーブ園入り口前	幼・男子	選定理由不詳（井戸の水がごぼごぼ音がする）	1264
9	「ひびくたけの音」 山崎山外縁部の柵のある小径付近	小3・男子	めったに聞こえない音だから	1255



2017.10.28. 山崎山 いい音！「音の絵ハガキ」

2017.10.28. 山崎山 いい音！「音の絵ハガキ」

図9, 10 子どもたちが選んだ山崎山「いい音（ね）！」ポイントの「音の出る絵はがき」の例。  
左からNo.3「ポキ!」、No.5「ざわざわの森」



図11 山崎山いい音（ね）！音MAP

### 3.2 学生スタッフの感想（兼古）

ワークショップの担い手となった学生スタッフからの感想文を集めて集計し、その言及部分と評価内容に応じて、(1)「子どもたちの様子・反応について」(2)「進行手順について」(3)「全体」の3つの項目毎に「肯定的評価」「課題・要改善点」「その他」の3つの評価軸に分けて整理した。(表4参照)

表4 学生スタッフの感想

	肯定的評価・成果に関するもの	課題・要改善点	その他の感想
子どもたちの様子・反応	<ul style="list-style-type: none"> <li>・楽しんで参加していた。</li> <li>・楽しそうにしてくれた。</li> <li>・楽しく活動できていた。</li> <li>・「いい音(ね)！ポイント」探しから戻ってきた子どもたちが、とても楽しそうであった。</li> <li>・(地図にまとめてみると) 出てきた音・場所があまりかぶっていなかった。子どもたちの見つける力はすごいと感じた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・対象年齢を小学生に設定していたが、実際に参加したのはもう少し低い年齢の子どもたちだったので、内容が少し難しかったかもしれない。</li> </ul>	
進行・手順	<ul style="list-style-type: none"> <li>・特に問題もなく安全に行えた。</li> <li>・チームの連帯が取れていた。</li> <li>・導入として「虫の博士」を呼び、音についての関心を高めさせる活動をしたことが、本編の活動にも生かされていったと感じた。</li> <li>・(導入の虫博士の解説で) 写真などを出したことでより興味を引かせることができていた。</li> <li>・少人数だったため一対一で子どもと触れ合うことができたので、よい経験になったと感じた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・どうなるのかと感じた。</li> <li>・進行が遅れていた。</li> <li>・プリンターやパソコンの台数を増やす。</li> <li>・もうすこし、活動の時間が取れるとじっくりできたと思った。</li> <li>・プリントアウトするのに時間がかかってしまっていた。</li> <li>・写真のアップ作業等に携わっていたが、かなり大変な活動だった。(スタッフの) 人数も少なかったかもしれない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・森林など子どもの好奇心が働くような場所では目を離さないように気を付ける(ことが重要とわかった)。</li> <li>・子どもたちの録りたい音を尊重するようにした。迷っているようならこの音はどう？と質問を投げかけるようにした。</li> </ul>
全体	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今までにない新しい企画。</li> <li>・体験したことがなかった活動だったが、とても楽しくできたのでまた活動していきたいと感じた。</li> <li>・少人数だったため一対一で子どもと触れ合うことができたので、よい経験になったと感じた。</li> <li>・地域の様子や子どもたちとの触れ合いなどがわかった。</li> <li>・当日は雨の上にはほかの会場でイベントをやっている、なかなかお客さんが行きづらい状況だったけれど、少人数ながら来てくれてよかったと思った。</li> <li>・雨天のため、音が探しにくいということもあったと思うが、晴れの日と違う音が聞こえてきたという面もあるので、おもしろかったと思う。</li> <li>・客寄せなど様々な経験ができてよかった。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・晴れの日では、どんな音が聞こえてくるのか、どんな音を子どもたちが見つけてくるのか、気になる。</li> </ul>

こうした感想からは、子どもたちが興味を持って楽しみながら参加していた様子や、本ワークショップへの参加が、学生たちにとっても、地域の子供たちと触れ合う貴重な体験となったこと、彼らがこの体験を通して、子どもたちや地域に関しての様々な発見があり、また工夫をしたこと。お互いに連携してすすめることの大切さを理解する、など、学びの場となったことがうかがえる。一方、ワークショップの進行に関しては、どうなるかと不安に感じていたり、特に「音の絵はがき」作成のプロセスでは、パソコンでの作業に時間がかかり、時間内に処理するには厳しい面があったと感じていたことがわかる。

### 3.3 考察 (兼古・小林)

今回、天候や(本ワークショップの)活動の宣伝不足、実施時間帯(昼時にかかってしまう、2回目は天候がさらに悪化)の難しさなどもあり、参加人数が少なかったため、この実践事例だけで、何がしかを明確に汲み取ることは、率直なところ難しいと言わざるを得ない。とはいえ、今回の成果物等や事例の中には、子どもたちと地域の音、環境との関係を考える上で重要な示唆的なことが含まれていると思われる。

「音の絵はがき」とそこに込められた子どもたちの選んだ音の種類やテーマ、そして子どもたち自身によ

るその紹介の言葉，サーバー上での各「音の絵はがき」の再生回数，さらに「音の絵はがき」の集積としての「音 MAP」などの成果物から，以下のようなことが見えてくる。

(1) 「音の絵はがき」及び「缶バッジ」というメディアの有効性

ネットワークサーバー上の各「音の絵はがき」（写真と音のセット）に対応するページと，メニューページがともに千数百回を超える再生数を記録していることは，子どもたちが制作し誰かに発送した「音の絵はがき」と，子どもたちに記念に渡した「缶バッジ」が，子どもたち自身のみならず，家族や親戚・知人といった「その先」の人たちが「山崎山の音と風景」に触れるためのメディアとして十分に機能していることをうかがわせるに足るものである。もちろんハガキや缶バッジからアクセスした人の中の多くは，山崎山や地域の「音」に特別な関心があったというよりは，自分にとって身近な子どもが参加し制作したのだからアクセスしてみた，と考える方が妥当であろう。その意味では，参加した「子ども」の存在もまたメディアなのである。より正確には（「絵はがき」＋「缶バッジ」）×「子ども」というメディアの潜在力が今回の結果に表れたものといえるかもしれない。そして少なくとも，こうした活動が子どもやその家族にとって，興味深いものであったということは言えるだろう。

(2) 幼児や小学1年生と，小学校中高学年の子どもの選ぶ音の質的違い

制作された「音の絵はがき」を見る限り，低学年（小1）や幼児（未就学児）の子どもたちは「ポキ！」「トントン」「じゃりじゃり」などの擬音・オノマトペをそのままタイトルに用いたり，「いどのみず」のように「ごぼごぼ」と流れる音が面白くて「いい音（ね）！」ポイントを選んでいる様子が録音の音声データなどからうかがえる。つまり音をリズムや質感などの感覚的に捉え楽しんでいる。これに対し，小学校中高学年の児童は「森がざわざわしていて落ち着ける」ことや「めったに聞こえない音だから」あるいは小学校2年女子の「鳥さんが歌っているみたいでよかったから」といった発言のように，心理的な効能や，希少価値，審美眼などの自分なりの価値観で選択していることが推察できる，興味深い対比が見られた。そして子どもたちの中に芽生えた，環境の中の音に対する感性や，審美眼，価値観が，やがて地域の聴覚的な価値観の発見につながっていくものと思われる。

(3) 「音の地図」から「音の絵はがき」へ

これまで筆者（小林・兼古）らは，フィールド体験活動において，様々なサウンドエデュケーションの手法を模索してきたが，とりわけ「音の地図」から「音の絵はがき」に至る取り組みの過程で，環境の音や地域の音の風景についてのいくつかの知見を得ることができた。そのことについて最後に記したい。

「地図」とは主として地理情報等を集約し不特定多数と共有するための“パブリックな”メディアであり，「はがき」はどちらかと言えば，個人から個人へ送る“プライベートな”コミュニケーションツールである。音の地図を描くとき，私たちはそれを「共有」するものとして思い描き，記録し表現しようとする。一方で絵はがきの作成は個人の感覚や体験の発露であり，私的メッセージである。このことは私たちをとりまく音や音風景の在りようを反映していると考えられる。それは，木岡（2007）が指摘するように，「風景が個人的展開と集団的展開を往還しつつ定着していく」ものであることと無関係ではないだろう。「地図」から「はがき」への展開は，私たちの聴覚的体験としての音・音風景体験もまた，こうした異なる位相を行き来するものであることに対応している。

さらに今回のように「絵はがき（写真）」を「音の出る」ものとして捉えなおすことは，筆者（小林）が「音の地図」づくりの応用・発展形として「音の出る地図」づくり（小林，2003）に取り組んできたプロセスと同様に，静止した世界（地図・写真）の中に一期一会の時間を吹き込む行為であり，「音」によって環境の中の「時間」性を際立たせることが出来るということを改めて実感させるものであった。こうした活動は，私たちの聴覚的な体験を抽象化された音符や記号，文字といった意味の世界，形式知の世界から，場と時に根差した一回性の体験，具体的個別的な身体知のフェイズへと立ち戻す行為でもあるとも言えるだろう。より感覚的，身体的世界に生きる子どもたちだからこそ，難しい課題にもかかわらず，今回のようなワークショップを自然と楽しむことができたのだと思う。

これらの考察から、専門演習でのこのような聴覚的なフィールド体験活動は、子どもたちや、学生たちにとって、地域や環境との新たな関係性を拓く契機となり得ること、子どもたちが自分たちなりの感じ方で地域の聴覚的価値を発見する方法のひとつとして大きな可能性を持つことが示されたと言えるであろう。

### 3.4 課題 (兼古・小林)

今回の実践を通して、改善を要する点や未解決の問題、新たな課題等が見えてきた。これらについて (1) 実施に関する課題, (2) メディアに関する課題, (3) 教育対象に関する課題の順に述べる。

#### (1) 実施に関する課題

学生スタッフの感想からも読み取れるように、「音の絵はがき」、特に今回のような「音の出る絵はがき」づくりワークショップの実施にあたっては、音や地点の選定から撮影・録音、集約・ネット上への公開、絵ハガキづくり、印刷、地図への集約まで、多くの工程が介在し、特にパソコンを上での作業については、一般的な学生のコンピューター技術レベルではやや難しい「FFFTP」など、知識と習熟を要する工程もあったため、この作業に時間と注意を注ぐあまり、成果物の共有など子どもたちにとって重要な活動が遅滞する事態が生じてしまった。いかに絵はがき作成に至る工程を効率よく確実にできるか、がワークショップの成否に関わってくる問題であり、効率的かつ簡便な方法の開発とともに、スタッフが側のリテラシーを高めていかなければならない。

#### (2) メディアに関する課題

「音の地図」「音の絵はがき」さらにその発展形としての「音の出る地図」「音の出る絵はがき」といったメディアの持つ特性や可能性について、さらなる検討が必要である。本稿では、「地図」=パブリックなメディア、「はがき」=プライベートなメディア、地図や言葉=抽象的、音=具体的・身体的・時間的といったように、やや単純化して述べたが、実際には、地図やはがきにも様々な種類や目的があり、プライベートな地図もあれば、パブリックなメッセージを持つはがきもある。とりわけ、今回対象となった小学生や幼児においては、こうしたメディアの持つ役割を明確に使い分けしているとは限らず、地図やはがきに対しての反応は、コミュニケーションというよりも、自己「表現」、内面の「発露」といった側面が強いことをさらに考えてみる必要があるだろう。さらに、一対一、一対多、特定他者か不特定他者宛てかといった、コミュニケーションやメディアのありようと表現の関係も介在してくるはずだ。今後の重要な研究課題である。

#### (3) 教育対象に関する課題

今回のワークショップの対象は当初、小学生を想定していたが、実際には会場を訪れた不特定多数が参加者となった結果、小学校就学以前の幼児の割合が多かった。小学生向けのワークショップ内容をそのまま実施してしまった点は、反省しなければならないが、それにもかかわらず、未就学年齢の子どもたちが、活動に最後まで飽きずに参加し、楽しんでくれたことは、大きな可能性を感じさせるものである。仮にもし、より低年齢向けに最適化した内容にアレンジできていたら、一層の反応やまだ見えていない成果がありえたのかも知れない。3-3 考察の (2) でも述べたように、リズムや質感など、音を身体的・直感的に捉える幼児の感受性を考えれば、幼児向けの「音の絵はがき」づくりのプログラム (例えば、「絵はがき」ではなく「カルタ」や「絵札」にするなど) の開発も今後の課題である。

### おわりに—フィールド活動の今後— (田中・兼古・小林)

共栄大学教育学部の田中ゼミ、小林ゼミ (兼古ゼミ) が共同で、時には単独で地域との連携の中で取り組んで来たフィールド体験活動は、「音マップ」や、「手づくり楽器」「音の絵はがき」づくりといった様々なサウンドエデュケーションの手法を取り入れながら、子どもたちや学生にとって身近な「地域」に耳を澄ます「音からのフィールド体験」という領域を開拓してきた。こうした継続的な取り組みが可能だったのは、

宮代町，春日部市，地元のNPO団体などからの，大学ゼミとの連携によるフィールド体験活動への，深い理解と力強い支えがあったからに他ならない。また地元の小学生・子どもたち，保護者の間でも，これらの取り組みが毎年夏や秋の自然体験活動等として受け入れられ，定着してきたことは，筆者ら（小林，田中，兼古）が書いた過去の論考で明らかにしたとおりである。そこには，この企画を成功させるために，就活等で多忙の中にありながら必死になって準備し取り組んできた共栄大学専門演習のゼミ生たちのひたむきな姿があったことも記しておきたい。それほど，地域にとって，子どもたちにとって，学生たちにとって，そして筆者ら教員にとっても，こうしたフィールド体験活動が発見と学びをもたらす重要な場となっていたことをあらためて思う。

このように，ようやく定着し始めた地域と大学との協働事業としてのフィールド体験活動が今後も継続して発展して行けるよう，大学における里山自然体験活動の授業科目化を強く願う。これは，この取り組みにかかわってきた筆者ら教員，自治体の担当者，地域の人々，教育関係者，すべての願いでもある。

## 謝辞

本論稿のもととなったフィールド体験活動，特に，2017年度秋の「山崎山まつり」での自然体験活動の中で「音の絵はがき」づくりの企画が実現できたのは，初めての内容であったにもかかわらず，快く受け入れて下さった「さいたま緑のトラスト協会」代表の八木橋秀雄氏のご理解とお力添えによるものです。ここにあらためて，御礼申し上げます。

## 参考文献

- 兼古勝史・小林田鶴子「音の出る地図から音の出る絵ハガキへ～QRコードによる展開～」『音楽教育メディア研究第4巻』日本音楽教育メディア学会，2018
- 木岡仲夫『風景の論理～沈黙から語りへ～』世界思想社，2007
- 小菅由加里，兼古勝史「2015年度まち・音・ひと・ねっとワーキンググループ活動報告 音の絵はがきづくりワークショップ」『サウンドスケープ』第17巻，日本サウンドスケープ協会，2016
- 小林田鶴子『まちの総合学習がはじまるよ「音の出る地図」をつくってみよう』，ブンテックNPOグループ，2003
- 小林田鶴子，田中卓也「専門演習における地域と連携した取り組み：宮代町里山自然活動を中心として」『共栄大学研究論集14』，2016
- 小林田鶴子「大学生と児童・生徒が共に学べる環境での芸術教育」，時得紀子編著，平野俊介，清田哲夫他，『芸術表現教育の授業づくり』，三元社，2017
- 田中卓也「専門演習における地域と連携した取り組み（3）」『共栄大学研究論集16』，2018
- 田中卓也，兼古勝史，小林田鶴子「専門演習における地域と連携した取り組み（2）宮代町里山自然体験活動を中心に」『共栄大学研究論集15』，2017
- 春日部市教育委員会社会教育課「子ども大学かすかべ」  
<http://www.boe.kasukabe.saitama.jp/syakyou2/syakyou/kodomodaigaku/kodomodaigaku1thisistoppage.html>（2018年5月5日）
- 日本サウンドスケープ協会「サウンドスケープ・エデュケーションとは？」  
<http://www.soundscape-j.org/soundscape.html>（2018年5月7日）

